

〈職場教育・キャリア教育の充実〉

地域連携や産学連携を生かした職業教育・キャリア教育 「児童生徒一人一人の社会で発揮できる力を育む授業実践」 ～キャリア発達における学部間のつながりを通して～

千葉県立印旛特別支援学校

電話 0476-98-2200

FAX 0476-98-0969



■研究のポイント

- ・キャリア教育の研究を進めるにあたり、働く上でワークキャリアは必要であるが、この研究では学部毎の共通する要素をライフキャリアにしぼって研究を進めていく。
- ・キャリア教育の研修を実施し、知識を深め、キャリア発達の支援方法について共通理解を図る。
- ・キャリア教育の視点から、各学部単位での共通する要素について捉え直し、整理する。
- ・児童生徒に対する教師の考え方や支援方法への意識について、本研究より変容を探る。

■学校の概要 <http://www.chiba-c.ede.jp/inba-sh>

本校は、印西市東部に昭和55年に開校し、佐倉市、四街道市、印西市(印旛の本埜地区)、酒々井町、栄町の3市2町を学区としている。知的障害を有する児童生徒に対する教育を行う特別支援学校であるが、障害を複数併せ持つ重複障害の児童生徒や医療的ケアが必要な児童生徒も在籍しており、看護師・養護教諭と担任が協力しながら、健康で安全な学校生活が送れるよう努めている。

平成24年4月、全県を学区とし、佐倉南高等学校内の3階にさくら分校(高等部普通科職業コース)を開設した。昨年度は第2期卒業生を社会に送り出した。

■研究課題

特別支援学校が児童生徒のキャリア発達を促し、社会自立・職業自立を目指した教育活動を展開する上で、地域社会との連携を生かした取組を行うことが重要。小学部から高等部に至る職業教育・キャリア教育の質を点検・考察するためのシステム及びカリキュラムの開発を行う。

■研究の目的と方法

〈研究の目的〉

昨年度の研究では、成果としてキャリア発達の視点を取り入れることで、教師一人一人が子どもたちの将来像を具体的に考え、将来を見通した指導・支援を行うことができた。一方、課題として「目標、指導方法、学習内容における学部間のつながり」が挙げられた。そこで今年度は、一人一人の意思や持てる力を発揮して自己実現を図りながら、主体的に社会参加、自立する姿を目指し、社会で発揮できる力を高めるために、キャリア発達の視点を取り入れた学部間のつながりについての研究に取り組むこととした。

以下の2点を目標とした。

- ・各学部の共通するキャリア発達の要素を柱として授業実践を行う。
- ・各学部の授業実践を共通理解し、学部間のつながりを図る。

〈研究の方法〉

「キャリア発達について学部毎の要素を整理し授業実践に生かし、児童生徒のキャリア発達を育むこと」を目的に各学部に通ずる柱を設けた。この柱の設定にあたり各学部のキャリア発達の要素を整理し、各学部が共通の視点を持てるようにした。その柱を生かして授業実践を行い児童生徒のキャリア発達を促していく。「児童生徒の将来を見据えながら、キャリア発達に対する学部間のつながりへの意識を高めること」については、各学部の授業実践を伝え合う場を設けること

で、キャリア発達の要素から設定した柱に対する学部間のつながりについて検討していく。また、教師を対象にアンケートを実施し、学部間のつながりに対する教師の意識についてまとめる。

■研究概要

＜柱「伝える力」＞(当日配布資料参照)

各学部が必要と考えるキャリア発達の要素には、人との関わりやコミュニケーションに関する要素が多く挙げられた。そこで、人との関わりやコミュニケーションを共通する要素と考え、柱を「伝える力」とした。また、本校では自分から伝えるだけでなく、意見や指示を受け入れることなど、人との関わりを含めた内容であると考え、「伝える力」は「相手に伝える力」と「相手のこと(相手の思いや考え)を受け入れる力」であることを共通理解した。

＜授業実践での成果＞

「伝える力」の目標を授業に盛り込むことで、児童生徒の姿から報告や連絡、他者への関心等においての変容が見られてきた。また、各学部とも「伝える力」に対する具体的な支援方法を考えることができた。

＜授業実践での課題＞

- ・「伝える力」を含めたキャリア発達の要素への取組
- ・教師間での支援方法の共通理解
- ・自分の気持ちを伝えにくい、又は発語が少ない児童生徒への支援についての工夫

＜ディスカッションでの取組＞

柱「伝える力」をもとに他学部の職員と話し合う場を設け、他学部が取り組んできた授業実践を知り得る機会とした。また、その授業実践から学部間のつながりについて考えた。

＜ディスカッションによる成果＞

職員の実践紹介を通して、支援方法や教師の意識においての学部間のつながりが見えてきた。
・支援方法…「伝える力」を育むために、視覚的な支援やモデリングの活用、言葉掛けの頻度、教師の関わり方、対人関係の拡がり等が挙げられ、個々の発達段階に応じながらも、傾向として小学部から中学部、そして、高等部へと段階的に取り組んでいる。この支援方法としての学部間のつながりが見られた。

・教師の意識…支援方法について教師ができるだけ子どもたちの力で取り組むことができるように支援を減らしたり、発展させたりしていこうとする教師の考えが見られた。その背景には生活年齢を考慮しながら繰り返し学習を重ね将来の生活に生かすことや「児童生徒ができる状況」から「児童生徒が考える状況(アクティブラーニング)」を作っていこうとする意図が伺えた。このように、児童生徒の将来を見据えた支援方法についての教師の考えは学部を超えて共通していた。その他にも、児童生徒の気持ちに共感し寄り添う支援の大切さが全体で共通していた。

＜アンケートへの取組＞

キャリア教育の理解や今年度の研究を通しての教師の意識の変化が、学部間のつながりにどのように影響しているのかをアンケートを通してまとめた。

＜アンケート結果＞

問い「他学部の要素」では「指導の積み重ね」や「他学部への関心」「段階的な支援」への内容が多く指導場面における具体的な支援方法が参考となっていた。また、支援方法を共有するためには、伝える場が必要であるとの意見が多かった。問い「教師の意識」については「伝え合うこと」「他学部への意識」「支援の継続」といった意見が多く、児童生徒に対する継続した支援への教師の意識の高まりが見られた。このことから教師の意識によって、その場限り又は同じ支援で終るのではなく、次の学部(将来)を見据えた発展的な支援になるということが共通した考えであることがわかった。

＜研究のまとめ＞

以上の結果より、柱を設けて授業実践することで、児童生徒のキャリア発達を促すことができた。また、授業実践の共有は学部間のつながりとして、簡素化及び発展的な支援方法や意欲面に対する支援、「児童生徒ができる状況」から「児童生徒が考える状況」を作るといった教師の意識が見られた。一方、課題として柱の目標のつながりの検討や支援方法が継続できるような工夫及び手段が必要である。また、今年度柱として設けた「伝える力」を含めた要素についての検討も必要であり、今後も教育活動の中に取り入れながら整理及び実践を重ねていきたい。